鎮守の森だより

NPO法人社叢学会ニュース
第74号
2015年3月3日

平成27年度年次総会概要決まる

「森と海の文化　くらし・いのり・自然」テーマに
海洋文化と社叢の関わりについて多角的に議論

5/30・31に宗像大社(福岡県宗像市)で

今年の年次総会・研究発表会・シンポジウムを5月31日(日)に宗像大社に隣接する「海の道むなかた館」で開催する。玄界灘に面し、古くは大陸との海上交通の要となってきた宗像で、シンポジウムでは基調講演に九州国立博物館の三輪嘉六館長を迎え、森と海の文化・文明の連環への論議を深める。

総会に先立つ30日(土)の見学会では、宗像大社を参拝した後、海を隔てた中津宮、沖津宮遥拝所を参拝。さらには沖ノ島の学術調査で出土した数々の国宝・重要文化財を展示する神宝館の拝観など、宗像大社と海、そしてその先にあるユーラシア大陸との結びつきを知る絶好の機会となる。

総会・研究発表会・シンポジウムの会場となる「海の道むなかた館」は宗像大社に隣接し、2009年１月にユネスコの世界遺産暫定リストに記載された「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の世界遺産登録を目指して、宗像の歴史・文化を紹介する施設。旧石器時代からの宗像の歴史展示のほか、３Dシアターでは、海の正倉院と言われる沖ノ島の祭祀遺跡などを記録した映像を見ることができる。

5月30日(土)　見学会:宗像大社辺津宮・中津宮と神宝館

10:00	宗像大社正式参拝・辺津宮高宮祭場等見学
11:15	フェリー発　大島へ
11:45～	昼食後、中津宮・沖津宮遥拝所参拝など(バス)
14:40	大島発　辺津宮へ移動
15:20～	神宝館見学→自由解散

5月31日(日)

9:00～10:00	海の道むなかた館館内視察・沖ノ島3D映像鑑賞
10:00～10:55	年次総会
11:00～12:30	研究発表
13:15～17:00	シンポジウム「森と海の文化　くらし・いのり・自然」 基調講演：三輪嘉六・国立九州博物館館長 パネルディスッカション
17:00～18:00	懇親会

第64回　関西定例研究会　報告

2015年1月24日
(於　コープイン京都)

甦る桜の園　～向日神社の鎮守の森～

講　　師：上田　昌弘(社叢学会理事・鎮守の森の会会長)
ｺﾒﾝﾃｰﾀ：糸谷　正俊(社叢学会副理事長・㈱総合計画機構相談役)

鎮守の森の会　1589(天正17)年の「向日神社の草木は一切刈り取りを禁じ、隣郷の者が立ち入って刈り取れば捕えて成敗する」と記したお定書きが神社に残っている。神社前の西国街道が町場になったことから人口が増え、鎮守の森の木が薪として伐られ森が荒れた。これ以後、薪を取る権利が入札で決められ鎮守の森は守られた。

戦後、薪を取ることがなくなった森は荒れ、陰鬱な場所になった。「鎮守の森の会」は2004年、これを憂えた初老の有志によってつくられる。

通る人の言葉に励まされ、休日と雨の日以外は朝から夕方まで竹や木を伐り、枯れた木を補植した。一年もすると森は明るくなり、野鳥や子どもがやってきて、観光客もやって来るようになった。向日神社は京都市の南隣り「向日市」にある古社である。

桜の園　笹部新太郎さんの桜の園があったことを知ったのは2005年のことだ。整備してゆくと向日台団地に続く道があり、真っ暗で「痴漢注意」の看板があった。真っ暗な森は団地の緑地で、持ち主の京都府に整備してもらおうと要望書を出した。

無理だといわれ、手伝うから何とかならないかというと、枯れ木を撤去する費用はあるとのこと、確かに大きな松が枯れていた。こんな経緯で整備をはじめたが、木や竹を伐ると山桜が現れ、光を受けて花をつけた。ところが周囲の斜面は緑地に指定されて放置され、不法投棄の場所になっていた。

顔見知りからここに桜の園があったことを聞いたのはそんな時だった。

笹部新太郎　笹部さんは大阪の資産家の次男で、東京帝国大学の法科を卒業した人。生涯を桜研究に費やし、莫大な私財を桜の保護に使い、1935年には向日神社の北に1万㎡の土地を求める。

さまざまな種のサクラが咲き誇る

花盛りの向日神社参道

ソメイヨシノに席巻され、なくなってゆく日本古来の桜を残そうと、全国から名木の種や穂木を集め、園丁を使って育て、大阪の造幣局や近江舞子、樫原神宮に至る街道など、全国の桜の名所に送り出した。

春の景色はすばらしく、桜の園とよばれたが、1961年、名神高速道路工事の土を取るために削られ、跡地にできたのが向日台団地。同じ年、笹部さんが移植した樹齢400年の荘川桜が芽吹いた。

1968年、水上勉はこの二つの出来事を小説『櫻守』に書くが、笹部さんがモデルでここが舞台である。

水上勉　水上勉は植木職人弥吉の目を通して笹部新太郎の生涯を書いた。笹部さんは竹部庸太郎と名を変え弥吉の雇主として登場する。

水上さんは時代を憂えた作家でもある。弥吉の祖父は木挽きで、水上勉の祖父も木挽きだった。「爺は、毎朝、鉈を砥ぎながらワイにいうた。山の自然が美しいのんは蔦を伐って木挽きが木を守ったからや」。

「弥吉が、この祖父のことを思い出して、深い感動を覚えるのは、この頃になって近在の山が荒れたままに放置されているのを見ることであった、京の近くにも、奈良の近くにも、荒れた山はあった。とりわけ、土地会社が山をひらき、造成地にする。緑地の荒廃を嘆く識者や役人も多く、緑を守れ、自然を守れ、と叫んでいるが、その残された山がそれでは真に守られているかといえば、そうではなかった。役人や学者は。山を放っておくことが自然だと考えていた。《そんな自然なんてあるものか》」。

今、桜の園には自生していた山桜80本と補植した笹部さんゆかりの桜20種80本がある。鎮守の森の会は活動を続け、間伐、補植、下草刈り、施肥、薬剤散布、落ち葉そうじと作業は毎日のように続く。

第62回　関東定例研究会　報告

2014年12月20日
(於　國學院大學)

鎮守の森には病気はない？

講師：矢口　行雄(東京農業大学教授)

1. 植物の病気と病害

健康な樹木は根から水分や無機養分を吸収し、細胞及び維管束を通り葉に供給する。葉では光合成を行い、その結果、根や茎は伸長し、葉は生い茂り、花を咲かせて実を結ぶ。このような正常な生命活動が乱されると、根からの水分の吸い上げが悪くなり、樹木全体が萎えたり、また枝の成長が止まり、花が咲かず実がならないなどの現象が起きる。これらの樹木の諸症状を広義の「病気」という。樹木の「病気」とは、健康な樹木と対をなして使われる言葉である。

植物を栽培し、人間が経済的損害すなわち被害が問題となる場合を病害という。従って病気であっても経済的損失を伴わなければ病害とはいわない。例えば、マダケごま竹病は子嚢菌類Apiospora shiraianaの感染により起きる病気であるが、この病気にかかったマダケは、その模様から高い経済価値を持ち、竹工芸品として利用される。このように植物が病気になっても、経済的損失が伴わなければ病害とは言わない。反対に、タケやササが開花すると本体が枯れ経済的損失が高くなるため、「タケ、ササ開花病」として実用病といわれるのである。

2. 病気の発生と対処法

病気の原因には内的要因と外的要因があり、外的要因には生物性病原(菌類、細菌類、植物や動物によるものなど)、ウイルス性病原、非生物性病原(土壌条件によるものなど)、気象条件、植栽条件(立地要因など)がある。健康な植物に病原菌を付着させてもすぐに病気になるというわけではない。

松は鎮守の森に多く見られるが、庭師による手入れをしていても急に枯れはじめることがある。一番の原因として考えられるのは松材線虫病である。病原体であるマツノザイセンチュウは、明治時代に輸入された米松について長崎から日本に入ったといわれている。4,000以上のマツノザイセンチュウが寄生しているマツノマダラカミキリが松をかじる時、センチュウは松の中へ入っていく。樹脂道や仮道管に線虫が入り込むと、根から水が上がらなくなり、松ヤニが出なくなったかと思うと、2週間程であっという間に枯れていく。

材木に潜んでトラックで運ばれたマツノマダラカミキリは、停車中に他のマツに飛び移り、パーキングエリア付近の山で急に松枯れが起こりはじめるなど、全国に拡散していった。害虫を駆除する際は、木を切ったあと放置せず、害虫が逃げ出さないようにラッピングすることを忘れてはいけない。

害虫のほかにも様々な原因があるので、詳しくは『樹木医が教える緑化樹木事典』(矢口行雄著 誠文堂新光社 2009年)を参照されたい。

害虫の場合、虫を退治すれば病気はなくなる。かつては殺虫剤の空中散布が行われていたこともあるが、松枯れが減少する代わりに人体や環境に悪影響があると考えられるため、現在では使用を中止しており、木を切らなくてはならないことも多い。木を伐るということに抵抗を感じる人は多く、御神木やシンボルツリーであれば精神的なダメージは大きい。祟りや、不吉なことが起こる前触れであると考える人もいるだろう。また天皇陛下お手植えの樹木など、簡単に切ることが難しい場合もある。鎮守の森にも病気は出る。しかし対処を間違うと被害は拡大する。早期発見と適切な対処が肝要だが、トラブルを避けるために、事前の説明や周知など配慮も大切である。　(文責・渡邉節子)

次回予告【第64回関東定例研究会】

◆日　　時：4月25日(土) 14:00～16:00
◆場　　所：國學院大學渋谷キャンパス120周年記念1号館2階2104教室
◆テ ー マ：風景の生態学 ― 飛騨古川における実証研究を例に
◆講　　師：廣 瀬　俊 介(ランドスケープデザイナー　風土形成事務所主宰)
◆上　　映：「飛騨古川祭―起し太鼓が響く夜―」35分
※ 共催：公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団　國學院大學環境教育プロジェクト

社叢学会ホームページを一新！！

URLは　http://www.shasou.org/index.htm

ぜひご覧下さい！

事務局から

●年次総会は別記の通り、久しくご無沙汰していた九州での開催です。玄界灘を臨む宗像大社は海と深い関わりをもつ神社です。見学会では海を隔てた中津宮を含め、じっくりと拝観いただきます。総会・研究発表・シンポジウムは例年通りの余裕の少ない日程ですが、充実した内容になると存じます。遠路ではありますが、ぜひ、ご参集ください。
　また引き続き、研究発表も募集しています。こちらも奮ってご応募ください。

●会誌『社叢学研究』第13号を同封いたしました。今号も例年に劣らぬ力作ぞろいです。今回はご投稿がありませんでしたが、社叢を訪れた感想文や紀行文も掲載することにしております。ぜひ、ご投稿ください。

●今まで社叢学会のホームページは事務局で細々と作っておりましたが、プロに委託することといたしました。今後、会員専用ページなども作っていきたいと考えています。ご感想など、ぜひお知らせください。

●1970年、アジア初の万国博覧会の跡地に作られた万博記念公園の所管が大阪府に代わるに際し、森本幸裕・当学会理事、糸谷正俊・当学会副理事長が中心となって、日本万博とは何であったか、その跡地利用の意味は何か、という原点から、公園の未来を展望するシンポジウムを開催いたします。開催日時は３月17日(火)13時～17時、場所はホテル阪急です。詳しくはhttp://kaigi.sub.jp/もしくはTEL06-6947-6522

編集後記

　いつもタイドの悪いM理事が心を入れ替えたのか、びっくりするほどの“ゆうとおせい”に！やればできるんじゃん！　と思っていると、さらにタイドの悪い人がっ！　もうね、この粘り腰には、怒るとか、あきれるとか、感心するとか、言葉が見つかりません！
　で、会誌です。100ページ近くというリッパな出来上がり。すごいでしょう。すごいと言えば、印刷屋さんとの間で「ものすごい表」と称して行き来したものすごい表。これだけの神社を調べ、数え、測り。この粘りもすごいわ。書類作りをすぐに投げ出す某理事には見習ってほしいものである。これからは粘り腰で押し返すから心しておくよーに！　　（藤岡　郁）

研究発表者募集中！

テーマ：社叢に関する理論的研究
　　社叢の保存・拡充に関する実践的調査研究
発表時間：20分(報告15分+討議5分)
応募締切：2015年3月末日必着
応募要領：住所・氏名を明記の上、発表内容を300～400字にまとめ、E-Mail、FAX、郵便で本部事務局に送付

次回予告【第65回関西定例研究会】

◆日　　時：3月28日(土) 13:30～15:30
◆場　　所：京都教育文化センター　102会議室
　　(京都市左京区聖護院川原町4-13　tel 075-771-4221)
◆テーマ：森林文化と文明開化―香春岳と武甲山をめぐる課題
◆講　　師：薗田　稔(社叢学会理事長・京都大学名誉教授)

発行人　社叢学会事務局　〒604-8115 京都市中京区雁金町373番地みよいビル303号
TEL 075-212-2973　FAX 075-212-2916
URL　http://www.shasou.org　E-Mail　shasou@ams.odn.ne.jp

社叢学会関東支部　〒368-0041　秩父市番場町1－1　秩父神社社務所内
TEL080-1514-5032　E-Mail　shasougakkai@hotmail.com